

実現せり、無国家社会の粗型

1

百万羽養鶏を設立することで、同時に理想の新社会を建設するという福里ニワの提唱に、周囲は驚いたものの、当人とすれば、あながち突拍子もない思いつきでもなかった。

それには先にも触れたごとく下地があるわけで、ニワは子供の頃から何故か破邪顕正の新国家建設の夢があつて、それを中国大陸に実現しようという想いがあつた。そのためには馬賊にならねばならないと信じ込み、十七、八歳の頃には中国へ渡るためのステップとしてまず台湾へ渡るがよからうと、密かに台湾航路の貨客船で密航したこともある。

台湾では一人で二年間暮し、彼地で知り合った医学徒福里俊雄と結婚したものの、早く死別している。以来、労働・新聞・保険等の職業を歩いてきたのであるが、天性の説得力と果断の才あつて、どの分野といえども成功せざるはなし、女ながらに各担当ポストの責任者を勤めてきた。九州の労働界に在る時には、単身かの炭鉱争議盛んな只中に乗り込んで、タオルつぶての飛び交う中で、終始笑みを浮かべながら調停の演説をぶつたこともある。

事情あつて九州から四日市へ移ってきたのであるが、四日市では新聞社の社長の顔面をひっぱたい

て退職した。その後、素人ながら宝石を扱うことをはじめたが、これにも間もなく成功して、四日市のハイソサエティの婦人たちをつかんで多額の収入を得、儲けた金で土地を買えば買うで、またまた大きな転売差益が懐に転がり込んできたのである。

しかしニワは如何に自分の地位が上がるのが、莫大な利益を手に入れようが、それで充たされるといふことがなく、自分の本来の生き方ではないことを感じていた。自分が全身をふり絞って当って、それでもまだ足りないような対象は何であるか？ 自分は馬でいえば奔馬である。この奔馬の私を存分に乗りこなし得る御者は見つからないものか、と探し求めてきた。しかし現実にはそれが求め得られないままに、ニワは二、三カ月置きぐらいに決まってひどい憂鬱の虜となり、とどのつまりは常に自死に解決の道を見出していった。

本来の莫大な活源モクゲンが流るべき通路を発見せずして、徒らに周囲に溢れ、やがて自身をも滅ぼさんとしていたのである。

そこに突然、何の合図もなく現われ出たのが特講であり、山岸ズムの思想であった。

ニワはこれこそわが道と直感した。こうした挙句の百万羽養鶏の提案だったのである。

一方山岸巳代蔵であるが、ニワの提案にあつて一人山岸のみが「まるで花が開いたように、心から嬉しそうに賛成した」(ニワの言)については、これも当然の理由があつた。

大体「百万羽養鶏」なんぞという途轍もない発想(それすら山岸は十万羽の十倍で、たいした数ではないとしている)自体が、自分の誇大妄想的な発想法とピタリ感覚的に一致していたし、なおそのような集団養鶏を以て新社会実現と重ね合わせようとするに至っては、自分が十年來構想してきた考え方と同じであつたからにはほかならない。

そのことを知るに「快適新聞」(山岸会文化部発行)の「百万羽科学工業養鶏特集号」(第一号)を見ると、山岸は「大村公才」のペンネームで次のようにいっている。「百万羽科学工業養鶏の構想とその実態」、創立総会の講演要旨か？

「かねて、十年ほど前になりましたか、この百万羽養鶏計画の構想を持ちまして、それから七年前に具体的な計画を建てたんですが、時期いまだしの感がありまして、その日を待っていたんです。幸いにして、今日その時期が参りまして、実現の日をみようとされているわけです。私がかねがね念願していた日がまさに到来した、こう申しあげても言い過ぎではないと思います」

昭和三十三年から十年前といえは昭和二十三年、戦後それほど経っていない時期である。彼は戦争中といえども一人黙々と未来社会の構想を練っていたわけであるが、敗戦とともにその実践計画として羽数百万単位の一体養鶏の構想を持っていたものとみえる。しかも七年前にその具体的な案を立てたというのであるが、七年前の昭和二十六年は、前年のジェーン台風によって、急速に山岸式養鶏法が世間の注目を浴びだした年である。

自分の養鶏法に大きく照明が当てられると同時に、山岸はさらに各人が協力し合つての集団養鶏の詳細な実行案を思い立ったのであるが、さすがそこまで至るには若干の時間を要した。一体養鶏、即理想社会の急速実現を目指して、それでも七年の歳月を要したのである。そして七年目といえどもこうした機会が得られたのは、一重にニワの発言に依るものであり、改めて山岸はニワの大胆さと実行能力に目を見張った。

こうして三月三日に話が出て、その計画がすぐさま會員の間に持ち出されるや、ぞくぞく人と金が集まりだし、同年の六月三日にはもう創立総会が開かれ、八月十二日には現在の春日の山が建設地と

決まり、地鎮祭がとり行われていたのである。この間僅かに五カ月余、まさに疾風怒濤のごとき勢いで、新社会建設の運動は進みに進んだのである。両者の役割分担は、人と金集めはニワ、山岸はもっぱら養鶏工場の計画に専念した。

原則とすれば、「一羽の鶏が完全に飼えれば、百万羽の鶏が同じように飼えて当然」(「快適新聞・特集号」)であるが、百万羽ともなると百羽単位の農業養鶏をはるかに越えたものであって、そこには様々な画期的な工夫が必要であった。

同紙「特集号」の計画案を読むと、例によって山岸流のバカでかい案が示されていて、百万羽達成は三年間で行うとしている。それも百万羽の第一期工事が春日であって、その後各府県に一箇所ぐらゐずつ造る予定であった。そして、そこで出来た卵粉はすべて米国に輸出用にふり向けられるために、国内市場と競合せず、年間二十億円以上の外貨が日本へころがり込むはずであった。

鶏の飼料は三割ほどさつまいもを使い、その他、伊勢の海に沢山ある海草やイモの貯蔵タンクの上で栽培したクロレラを使うが、米国からも大量に飼料を買いつける。二十億円の売り上げで全部飼料を購入して、それを日本に輸入する。そうなれば養鶏界が喜び、国中にふんだんに卵が溢れることになる。

また工場には暖冷房装置を設け、すべて機械化して人手を最大限に少なくする。工場に暖冷房装置をつけるのは、鶏自体のエネルギーの、卵になる部分が、暑さと寒さに非常に左右されるので、工場内の気温を一年中春のような状態にして、産卵率を高めようというものであった。一日五時間労働で、一万羽に約三人必要とする程度であるが、実働時間からすれば一人一万羽飼うことも可能である云々。

まことに壮大且つ現実的なプランであった。「全人幸福の産声、百万羽科学工業養鶏」の誕生は、悠久に変わぬ真実世界のはたまた、全人史上の輝く太陽として、とこしえに記されるであろうことを」と熱気のこもった文章も見える。こうしたお互いが自己であって自己でないような運動の渦中にあって、山岸、ニワの両者が結びつけられてしまったのは必然であったろう。百万羽養鶏創立が提案されたその月の末には、二人の婚約発表がなされた。

この激流のごとく進展した新しい国づくりの模様について、当時の中心的メンバーに集まってもらい話をうかがうことができたので、その要旨をまとめてみよう。

大島さん、百万羽養鶏のことを最初に呼びかけられたのはいつですか？

大島(康弘) 三十三年の三月末やね。四日市の菰野こものの見性寺で、全国の養鶏係が寄る毎月の例会の時に初めてその構想を聞きました。それで私は京都福知山ふちやまの家に帰らずに、そのまま四日市に止まることにしましたんや。

福里(ニワ) その時はみな活気に満ちてましたからね。呼びかけの方も私一人じゃどうにもならんというので、高知の産田英尚うたひなかつさんに来てくれるよう電報打ったんだけど、もうそろそろ電報がついている頃やろうと話しているうちに、産田さん、四日市に来ていた。驚きましたね。(笑)聞いてみると、電報見るなりすぐ飛行機で飛んできたということでした。

——ということはこの構想は、一部の積極分子が勝手に進めたということですか？

福里 そういうことでしょね。私なんか山岸会に入ったばかりで、会の組織がどうなっとるのか、何も知らない。

奥村（通哉）有志で提案して、総会ではかったということでしょう。いわば緊急動議です。

——普通の組織の観念からいえば、正規のルートを通っていない非合理的なやり方ということになるんでしょうが、いつでも新しい歴史がつけられる時には、そんなふうには少数の積極分子によって、最初の突破口が開かれるということでしょう。

大島 またタイミングもよかったですな。その時分各支部の養鶏係は一体養鶏をどうしてつくろうかということが夢で、みなそれに熱中していた。山岸会の特講受けて、こういう世界つくりたいという理想を持っていたんです。一部では養鶏の技術だけでなしに、田植を一緒にしようというんで、会員の全部の田を労賃も何もいらんで、みなして朝から晩までかかって一体産業の実践をしていたんやけど、どうしてもどかしさがあつた。けどどうにもならん。そういう地盤の上に機関車役の産田さんが、持ち前の大風呂敷で呼びかけたもんやから、ソレツとなつた。（笑）

奥村 春日みたいな発想は、突然出てきたというわけではなくて、その頃いくつもあつたんです。和歌山の六川、山口県大島、京都久我、広島じんせきの神石というふうには、しかしそのどれもが中途半端なものでしたから……。

福里 その中途半端さの責任が山岸先生にかぶされていたんです。山岸さんはいつでも中途半端で仕上げをしたことがないと。それで四日市では山岸さんは悪評だった。栃木県の日光、鬼怒川温泉でも一体経営としてやりかけて、結局、形にならないうちに崩壊した。それも山岸のせい、山岸は山師やインチキ師やといわれていたんです。ですから百万羽を打ち出した時の一番最初の壁がそれでした。

奥村 四日市は山岸会でも一番盛んな支部で、鬼怒川温泉にも四日市支部の人が何人も出資してい

ましたからね。

福里 それを私が白黒つけようというんで、みんな呼んで、どこがどう違っていたのか、事細かに検べた。山岸がどこでどういったか……。そうしたらその場ではその人たちのいい分は全部論破されて、山岸先生がウソをいったことにはならなかったことが判明したんです。

——障害ということではなくとも、山岸会との摩擦もあつたように聞いてますが。

松谷（桐夫） そういう問題もありましたね。

大崎（博常） 養鶏の方のメンバーの動きと幸福運動を進めている山岸会の動きと二本建てになつてきたような関係で、養鶏の方に優秀なメンバーをみなとられてはいる山岸会とすれば、百万羽の構想で大いに打撃を受けたわけです。

奥村 これでは会の地方組織は全部つぶれるというんで、特に反対があつたのは会の本部の組織科の連中です。一部有志の提案でそんなもの出来たのでは困るとなつた。私も疑問に思つて宝寺で山岸先生に出会つた時、会の組織を通じてやつてもらわねば困ると苦情をいいました。したら先生は、「出すところは出しますよ」といわれて、「はア、そうですか」と引き退つたのを覚えてます。

松谷 百万羽を盛り上げた原動力は、当時一週間泊り込みの養鶏特講というのをやりました。赤本（注『山岸式養鶏法』）を使って。これは特講を受けた後に、会の養鶏係をつくるための講習会でしたが、この講習会での成果が大きな役割を果したんです。

大崎 各県に大体一人か二人ずつ養鶏係がいて、県下の有力者で優れた人物がなつたんです。これがみな動員された。私のところも私が養鶏係になつたところへ産田さんが来て、やめて来いといいました。

藤川（勘多） その頃は地方では養鶏が中心でしたからね。そこに山岸会とのズレがあった。そのズレが百万羽の構想によって、さらにハッキリしてきた。従来の金儲けの手段と考えている人と、新しい社会をつくろうという人と。

大崎 全体とすれば、やはり特講の果した役割が大きいです。まず養鶏で特講に行く。一体のことをぶち込まれて、帰ってきてすぐ奥さん送って、子供や年寄まで次々に送って、家族全部が特講終了者になっている家庭が多かった。娘や高校生に至るまで……。そういうことで、どこでも市単位ぐらいで、会合が持てるようになってました。

——先祖伝来の財産を整理して親子供まで連れてくるのは大変だったろうと思うのですが、自分が説得するのを特講に送ることで肩代りしてもらっていたわけですね。橋本さん、呼びかけられた時どうでしたか。

橋本（正治） 私は呼びかけられたというより、呼びかけて歩いた方ですが、湯の山の愛研にも行きました。愛研の最後に財産整理の話が出て、肥柄杓一本に至るまで処分して持って来いということでした。それに対してすぐに共鳴した人もあれば、反対した人もあった。今おられませんが、京都の明田正一という人が一番最初に名乗りを挙げられました。そして山岸先生がみんなの前で後光がさしているといわれました。それで明田さんは二日目か、三日目にもう荷物を積み出すんで、私も荷物整理に手伝いに行ったのを覚えています。

大島 その場で音頭取りしていたのは産田さんで、先生はいつでも人の蔭に隠れて小そうなっているんです。それでも産田さんのいうことは結局先生の意志で、有り金全部持ち寄せ、墓石一つ残すなということでした。

——大島さん、残された故郷の家族の方々は問題なかったわけですか？

大島 そらありましたよ。それを振り切って、妻も子も財産もすべてを捨てて、この道でやりきろうという思いでした。赤堀の小林進さんの離れに福里先生が住んでおられたので、その一間にわれわれ三人が入り込んだんです。ここで百万羽の計画書つくったんです。具体的に、数字的に百万羽にするまでの計画書です。

大島（昌子） 私が女の中では一番早くて、四月二十九日に行きました。その日はお寺かどこかの縁の下に寝るもんやと思ってきました。その前に大島の方から離縁状が来ていまして、離縁するから来たかったら来いというて。それ読んで私は何かあるなと思いましたが、おじいちゃんはびっくりして大島のところへ出かけたんです。そして呆気たような顔して帰ってきましたね、私が「おじいちゃん、お帰り」というと、いきなり「昌子、どの田圃から売ろうか」とこういわはった。（笑）そして男一人やとくわけにはゆかんから、十年間遊ぶと思うて行ってくれといわれて、すぐに子供二人連れて出てきました。それで先生たちが移られた太田旅館へ行きましたが、その時の太田旅館の空気はまるで違ってましたね。活気がムンムンして……。

2

このようにして四日市にブルされた活源は、一挙に春日に向けて放出されたわけであるが、工場誘致は他になかったわけではない。和歌山県由良町、三尾川町は町を挙げて誘致運動をやっていたし、三重県阿山町からも話があり、最初本工場は、吉良の仁吉の荒神山で知られた鈴鹿でやろうとい

うことで、現に土地も一万二千坪買ったのである。

それが現在の春日（三重県阿山郡伊賀町川東五五五）に決まったについては、この土地の村長で会員の中山保男ら町の有力者がみな積極的に推したことで、春日の西ヶ峰から東部へ向けてずっと開けていて、将来広げていける展望があったからにはかならない（現在約十萬坪）。しかもその買収の仕方が山岸式でふるって、広大な土地をポツポツと重点的にまばらに買っておくのである。仮に大企業がその土地を買い占めにきても、散在した山岸会の土地が邪魔になって手がつけられない。

土地が決まれば、すぐさま人が入った。平地をつくるために十五トンのブルドーザーを入れて、ほとんど山肌を削り落とすのである。浅いところでも一メートル、深いところでは二メートル余も削り落とした。土地を広げる一方では、何よりもまず宿舎を建てねばならない。山の格好な地面を見計らって第一号宿舎を建てた。宿舎は最初は全部自分たちの手で仕上げた。現在もあるかまぼこ宿舎は鶏舎を二つ向かい合わせてつくったもので、日頃鶏舎をつくり慣れている彼らには簡単な工事だった。

この第一号宿舎が建てられたのは、七月から八月にかけて。八月十二日の山岸巳代蔵の誕生日には、当人は名古屋の講演で不在であり、しかも土地はまだ買収していないにも拘らず、起工式のお払いの儀が行われた。ついで九月十八日は福里二ワの誕生日であり、この日に初めて雛を入れる雛入り式（雛の嫁入り）が行われた。山岸とすれば、それぞれの誕生日を以て記念日をつくり、異体同心で仕上げてゆこうという意志があったのである。

折悪しくこの日は台風の最中であつた。その台風の真只中、山岸も赤土で泥んこになりながら、徹夜で新育雛舎を完成したのである。十八日朝、ようやく雛が入られるようになって、雛が届くと、山岸は新妻の両の掌に、それぞれ雛を三羽ずつ乗せて、「これがレグホンですよ」「これが山岸三号で

すよ」と説明しつつ「さあ入れなさい」と各々指定の育雛舎に雛を入れさせた。山岸は三という数字に何かを感じていたらしく、この日に入れた雛の数は三千三百三十三羽であつた。

このようにして着々進められつつあつた百万羽養鶏であるが、表向きは株式会社を名乗っていたが、自分たちは新社会実現の思いがあつて、正式には「ヤマギシズム生活実践春日実験地」とされていたのである。これが理想社会であるというよりは、理想社会の実験をする地、理想社会のミニチュアのつもりだった。それが分離して春日は試験場、他は享受の場所としての実験地になったのは、昭和三十六年、兵庫の北条実験地が出来て以後のことである。

この山岸会の実験地は、その後増えつづけて、現在全国に三十カ所ほど（卵肉の供給所を入れて）あり、通称「財布一つの村」「金のいらぬ仲良し村」の実績を誇っている。

この実験地の具体的内容について知ろうと思えば、それは各人別箇に調べていただくより仕方がないのであるが、出版物で容易に見られるものでは山岸会編集・発行『私見たヤマギシカイ』（野本三吉、野坂昭如、足立恭一郎、鶴見俊輔、真木悠介）、山岸会文化科編『Z革命集団・山岸会』（ルック社）新島淳良著『阿Qのユートピア』（晶文社）等がある。このうち『山岸会』の「自己解説」によると、理想社会の縮図、あるいはモデルとしての実験地には「金がいらぬ」「財布一つで給料や分配がない」「階級や長がなく、無報酬」「物質豊満・自由使用」等々の特色があるとしている。

その若干を復唱すると、同じ太陽の下、この地球上に住んでいるということは、一家の中で住んでいるのと同じことである。同じ一つ家の中で金があるなどおかし。人と人との間にお金やチケットがあるということは、それは相手を他人とみているからであつて「私はあなた、あなたは私」の一体の村には、何ら取引や貸借の金銭受け渡しを必要としない。ただし対外的、現実的にはむろん金銭を

必要としているわけで、集団で働き、各個人に分配することのない不分配経済の在り方は大きな収益を生むことになる。

この村では働いても働かなくても、給料も罰則もない。働いて得たものを分配して狭く囲うのではなく、ちょうど空気の使い方のように、公の広場に持ち出して、その人がその時の必要に応じて適量使っていく仕掛けになっている。

またこの一体社会には、人が人を監視するということがない。人が人を監視するなど人としてすべきことではなく、真実にはできることでもない。自分が行動するのは絶えず自らの内なる声によってであって、命令や法規や条文によってではない。各人が各人の能力と持ち味に応じて仕事を樂しむ分においては、監視というものは必要ない。

村の運営については、何事も同列横の全員一致点によってなされる。寡頭独裁や多くの力で少数を押しきる多数決原理をとらない。聞くべきはむしろ少数意見かもしれないのだ。長はないといつても職務分担はある。この職務分担も固定しないよう、半年毎の総会によって一旦解任される。どれほどに実績をあげても階級が上がらないし、待遇もよくなるないし、ただ働きであるといえ、通念からすれば随分不都合のように聞こえるが、むしろ、そこに安心して働ける境地がある。一体の人々の唯一の喜びは、そこに自分が活かされ、人生を全うしているところにある。

村人には、権力欲も支配欲も征服欲も所有欲もない。したがって財産というものを貯えて守る必要もない。あるのは全世界の頭脳・技術を持ち寄って、衣食住、生活必要物資を空気や水のように豊富に生産しようという考えであり、その物資をまたひとつところに偏在させないで、万人に使用の機会を均一に与えようという思いだけである。

つまり経済的には金はいらぬ、給料・分配はない、制度的には規則・監視がない、階級・長なし、報酬もない、心理的には権力欲・支配欲・所有欲もないというので、まるでないづくしによって成り立っているのが山岸会であるといえるだろう。対立というものが否定されている以上、この村には敵というものがいないし、所有も本来ないものとされる以上、泥棒もないことになる。(それでいて物が始終なくなるというわけでもない)

ここにおいて前掲書では、実顕地を要約すれば次のようなものである、と如何にも愉しそうに定義づけている。

「何も持たない裸の人達の群れ、それが真の自由人。……軒端にさえずる雀さえ、花に飛びかう蝶の群れとて、自分の家も財産も持たないのに、持たないからか、あの気軽さよ、楽しさよ。蝶になりたい、花になりたい。裸で生まれて裸で死ぬ生身の途中の人生を——。ヤマギシズム実顕地は、何も持たない放した裸の人達の群れである」

3

こうした山岸ズム生活実顕地の諸条件の中にあっても、ことに問題になるのは権力問題であって、山岸ズムの根本が無支配社会を目指すものである以上、一部の人間による強権支配を避けることが最重要問題である。如何にしたら、永久に権力支配を避けることができるか? この発想こそが山岸ズム実顕地の他に比して最も優れているところであり、そのための種々機構が与えられているところ、他にみられないすばらしい特徴なのである。

一口にユートピアといわれるが、マリー・L・ベルネリの『ユートピアの思想史』でいうように、これまでのユートピズムの大半は、必ずしも進歩的でもなければ革命的でもなかった。その権力構造をみればユートピアといわれるものの大半が、不寛容で権威主義的な性格を持っているのである。プラトンの『国家』やトマス・モアの『ユートピア』には奴隷が存在しているし、ブルタルコス『リュクルゴスの生涯』のスパルタでは農奴の大量殺戮が行われている。またその生活は多く画一的である。このイタリア生れの若い女性には、歴史上のユートピアの諸著作を丹念に調べてみて、最後には、輝やかしい例外であるモリスの『ユートピアだより』の場合のように、確実に個人的自由の上にユートピアを築かない限り、どんな歓喜の響きを持った計画といえども、必ず無気味な桎梏的世界、ひいては牢獄と変わらざる結果になることを発見している。

このかつてのユートピズムの轍を踏むことなく山岸は、自分の社会においては、今日のわれわれがとっている比例代表制による間接民主主義を否定した。最後の一人までが納得し得る、直接民主主義の全員一致制をとっているのである。そのためにここでは投票による選挙というものがなく、あるのは例え三日かかろうと二十日かかろうと、みなで車座になって話しあう研鑽会だけである。

実際の職務分担の会の運営は、委務し委務される係によって行われるが、この係も独走権力化しないよう、長というものが設けられず、係は半年で一度解任となる。また係三人(以上)制となっていて、必ずどの係も三人となっているのは、一人がいなくても独断が行われないための配慮である。機関としても、百万羽、山岸会、研鑽学校、出版社とそれぞれ独立機関としてあるのも、同じ意図からなされているものである。

間接的(あるいは基本的)には、金銭生活というものがなく、児童は親元を離れて学育舎に入

っていることも、大きく権力集中化を妨げている筈である。

なぜなら貨幣とはシエクスピアが描いたごとく、黒を白に、醜を美に、悪を善に、老を若にいい変えることができるほどの力を持ち、事実上それは人間に差別を与え、貨幣の集中において同時に権力の集中を意味している。貨幣はあらゆる価値の集約的表現であり、人は貨幣を積んで人を支配し、持たざるものはまた貨幣の前に甘んじて奴隷となるのである。この物神崇拜としての貨幣制度から解放されていることは、即ち階級差別からも解放されることを意味する。

またエンゲルスに聞くまでもなく、家族制度は財産の発生と併行して発してきたものであることはよく知られているが、それならば、財産の消滅において家族制も暫時改変・消滅の方向を辿らざるを得ないことになる。山岸会における児童の全寮制は、歴史的必然に添っているとせねばならない。

そもそも家族とは小集团的利己的才能を育てる巣であり、社会の一体関係を分割して止まないものである。そして安定した家族と安定した体制(国家)とは見あうものであり、国家はやがては自身自身に還元され得るとみるが故に、家族の中の服従と忠誠の徳性を擁護するのである。反対にいえば絶えず権威的に傾き勝ちな家族なるものの在り方こそ、国家存立の細胞であり、基盤ということになる。家庭のそうした権力的志向の環境から子供を解放することで、権力などとは縁のない子供を育てることが予想されているのである。

しかしそうはいっても以上はあくまで意図乃至予測の範囲の問題であって、思想、機構と現実の在り方とは異なる。むしろこれまでの山岸会史の中では特定の人物の独裁と、グループによる独裁の傾向は何度も繰り返されてきている。山岸の死の前後などKなる人物が山を完全支配し、道に倒れた木一本Kの許可なくして移転できない、といった状況もあったのである。どうしてこういうことになる

かという点、これはやはり人間の度しがい権力志向の故であると同時に、思想自体にも問題があるわけで、山岸ズムにおける個の尊重と私の否定の思想は、状況に応じて、どちらにでも偏向することができるからである。状況が緊張してくれば、必然的に「私の否定」を楯に君臨する輩が現われる。「私意尊重公意行」（私意を大いに出しあって、全員一致の公意において行う）というが、公意行は公意絶対行であって、如何なる私もはきむことはできないとされる。しかし例えば権力欲の強い人事係が（自分ではそうは思っていないと）、公意絶対行を循に不当人事もやり得る。人事係自体がもっと強い特定人物の手先になっていて、動かされている場合もでてきたりする。

また山岸ズムにはモチのことはモチ屋に任せるといふ思想があるが、この考え方がやはり一般的には愚衆主義に導き、特定の専門家を固定化させるといふ傾向もでてくる。係半年委務制といつても、その仕事はその人の持ち味（個性）である以上、十数年でも同じ係が仕事をつづけるといふことがでてくる。その結果その職場はどうしてもマンネリ化してくるし、権力化傾向を帯びざるを得ない。それは一つの機関内においてもそうだし、機関と機関の間にもいえることなのである。

そして山岸ズムにおけるもっと重要で隠されていることは、権力化あるいは独裁の抜け道がないわけではない、というよりは実力と独裁を一手に握った個人乃至は機関といふものの必要を考えているらしいことである。かつて自ら独裁的手腕を発揮していた某氏の言によると、生前山岸は「衆議独裁」といいいい方をしていたという。これの真の内容はどのようなものか今は知るべくもないが、あるいはバクーニンが一時考えていた、民衆の徹底自治と無政府を保証する秘密の政府（アナキズム独裁）といったものかもしれないのである。

「私意尊重公意行」を絶対に行える人物の独裁、もっとわかり易くいえば私心の一片だにない、自分

の全部が他人であるかのごとき人物の独裁である。結果としてそのような存在は、愛情深い親が子供の素直さ、活発さを保護しているようなもので、民衆の眼には独裁とは映らない。

山岸ズムの専門分業観による委務するといふ考え方は、究極的には会全体（人類全体）を単独の誰かに（全員一致で）委務する、といふ考え方につながることは容易に推理し得るが、現実には山岸にそのような考え方があったようである。そこに、後の我執のニセ独裁者に口実を貸す隙間があったといえるが、何れにしろ山岸ズムの究極志向が無強権であるところから、何れの権力傾向も長つづきではない。

とどのつまり無強権によって、一人一人が真に活かされる村を全世界に拡大しよう——というのが前掲書の『山岸会』の最終的な呼びかけである。しかもそれは必ず将来において達成できるとする。なぜなら何よりも方法論として「現状そのままですたートできる」といふことがある。

「この村を造るには、現状のままで、政治体制も社会機構も家族も財産も、破壊も撤去もする必要がなく、周囲環境はそのまま、その気その考え方になるなれば、今すぐ実現できる簡単な方式である」（『山岸会』）

このいい方を私流に敷衍すれば、社会改革をいわゆる政治闘争によって行うならば、政治闘争の終わるところ即ち社会改革の終わりと成る。極端な例をあげれば、占拠やバリケードが封鎖されたならば、数日から数カ月において破綻落城することは目に見えている。社会変革をそうした非日常的なやり方ではなく、もっと日常的なやり方において行えないものか？ 育児や生産や遊戯すること、つまり生活自体において、変革が可能なものならばこれほど楽なことはない。

そうした発想をいとも簡単に満足させてくれるのが、実顕地という生活機関の建設とその拡大であ

る。生活即革命、生活がある限り革命は中断されることがない。即今の一瞬といえども革命が行われていることになる。あえて反体制・体制変革をいわなくとも、自ら変革されることで、やがて体制自体自ら変革されざるを得まいとみる。その最終段階に至るまでの過程を、前掲書では五段階にわけて次のように説明する。

- (1) 質、量共に実顕地への目標時代、基礎時代（一九六一年以降十年間）
- (2) 質・量共に真正・適正実顕地よりの出発（一九七〇年以降現在）
- (3) 村とか町全体が実顕地化する実顕地普及時代
- (4) 一国内社会全体の実顕地化、ヤマギシズム時代
- (5) 国境が外れて全世界ヤマギシズム社会化への出発

このような大まかな段階を想定しつつ、実顕地を北は北海道から南は九州に至るまで、戦略的に配置しつつあるのが現在の姿である。この拠点実顕地がやがて生活体としての自己増殖を遂げつつ、拠点実顕地同士が有機的に結びつき始めるのを待つ。このようなインクプロット方式（インクのしみみ作戦）こそ、かの石川三四郎が提案した地理的重点主義（重点地域は異なる）にはかならない。

毛沢東は「その周囲を白色政権にとり囲まれながら、一つの小さな、あるいはいくつかの小さな赤色政権の地域が、長い期間にわたって存在していること」（中国の赤色政権はなぜ存在することができぬのか（一九二八年）を説明して、その原因の一つとして地方的農業経済（中国は統一した資本主義経済ではない）であることを挙げているが、統一した資本主義経済社会といえども、イスラエルのキブツの哲学者マルチン・ブーバーのいうように、無数の「割れ目」があつて、その「割れ目」の中では、無色協同体は充分棲息していけるのである。現に実顕地は根源的には「法」を否定しながら、現行法の

すべてを承認しているし、自らも資本主義内の株式会社法と農事組合法の仲間に入ること存在している。

ただし如何に体制側と衝突しないといえども、実顕地がさらに拡大し、体制側がその無強権性↓無国家性に気づいた時点では、何らかの相克が避け得ないことは想像できる。しかし、そのような協同体における社会的性格の論議は、今日牛毛のごとくある協同体論に任せるとして、山岸巳代蔵にはもつと根本的で深刻な独自の問題があつた。

それはどういうことかという点、山岸ズムにおいては表面より内面、見える部分より見えない部分にこそ本領があることは既述した通りである。同様に社会より人間に、他人より自己にアクセントが置かれることは当然のことであろう。社会全体に自由一体・独立自治の地域が増殖されてゆくためには、その前にまず人間存在の側に自治一体の自覚がなければならず、さらに他人に自治一体を求める以前に、自己自身に自治一体の自覚とその表現がなければならぬのである。

根源的に問題になるのは、自己自身の一体生活にほかならない。いい返えれば、もし自己自身において完全な一体が成立しないならば他に広がりやうがないであろうし、成立したならば社会的にも必ずそれが波及的に成立し得るに違いないとみる。すべてこの世はコロンブスの卵であつて、一が出来れば千、万の繰り返しが可能である。見本は二つなくとも一つあればいい。もし完全見本が一つもなければ繰り返し、模倣のしようがない。

先の著書においても、仮に、もしこの実顕地の在り方が本物ならば「あたかも池中に投じた一石のように、波紋が次から次へと伝播して、やがて国中、世界中そうなること必然である」としているが、無数の実顕地が出来るためには、一つの完全無欠の本物の実顕地を実現する必要がある。そして

一つの完全な実顕地が出来上がるためには、一箇の最低単位の一体生活が成立する必要がある。

この最低単位の、つまりは男女二人の完全な一体生活を山岸は自らにおいて行わんとした。山岸は明田正一宛の手紙の中で、「諸畑(京都)の革命は世界革命の第一発であり」「先ず自家と、諸畑を固めて立証し」というが、地域の革命が立証されるためには、自家の革命が立証される必要がある。今はその自家の革命が離別という形で失敗に終わった以上、如何にしてもニワとの一体夫婦を完成して、世界革命の見本をみせる必要があった。そこに山岸における他にみられない、夫婦関係の特殊性があったのである。

このような崇高ともみえる全人的観点から出発した山岸夫婦ではあるが、現実的には、山岸は妻のニワとの間で死の直前に至るまで悪戦苦闘を重ねざるを得なかった。ニワは結婚早々、もう山岸から逃げ出すことを考えていたのである。ニワからすれば、山岸は結婚するやいなや急転直下人が変わり始めて「君子豹変す」とはこのことかと思ひ知らされた。

やがて雛入り式も終わり、十月十五日、時の有力政治家である広川弘禅を迎えて、正式の百万羽養鶏開幕の式典が行われたが、その際、ニワは祝賀の辞を述べるこれがこれほど辛いと思ったことはなかったという。なぜなら一応構想が実現したこの時点で、ニワは山から逃げ出そうと考えていたからである。

その挙句に、翌三十四年一月、ニワが山岸の顔にぐらぐら煮立った熱湯をかけるという事件が起きた。つまり三月に百万羽の提案があつて、正月は春日で過ごそうということで年末までに四日市の全員が山に移住した激動の十カ月の間中、その背後では山岸夫妻の、これまた激越なる関係がつづいてきたわけである。